

峨眉山の現状について

二階堂善弘

1. 四大仏山としての峨眉山

2011年夏期に筆者は四川の寺廟調査を行った。そのうち2011年8月10日と11日の2日間にわたって峨眉山の寺院を訪問した。

四川の峨眉山は、古来より名山としてその名を知られてきた。現在では、山西の五台山、安徽の九華山、浙江の普陀山と併せて「四大仏山」と称される仏教の聖地となっている。五台山は文殊菩薩、九華山は地藏菩薩、普陀山は観音菩薩、そして峨眉山は普賢菩薩の道場とされる。ただ普陀山については、陸地の山ではなく海に浮かぶ山、すなわち島であることが他と異なる点である。

しかし峨眉山はもともと道教で重んじられた聖地であり、十大洞天には含まれないが、三十六小洞天のうちの第七洞天に位置するものである。

伝説では黄帝が峨眉山に行き、天真皇人に教えを請うたという話が知られており、『道教義枢』巻二には次のような記載がある。

昔黄帝登峨眉山、詣天真皇人、請受此法、駕龍昇天。

ただ黄帝については、広成子に教えを請うたという話もあり、この説話と重なることから、広成子イコール天真皇人であると見なす場合もある。いずれにせよ、あくまで伝承に過ぎない。もっともこの伝承のために、峨眉山にはかつて広成子を祀ることが行われていたようである。

むしろ現在の峨眉山に全く仏教系以外の施設が無いわけではなく、仙峰寺と九老洞のある一帯と、それに純陽殿は明らかに道教系の施設が多い。特に九老洞はまた九老仙府とも呼ばれる。一帯は峨眉山最大の洞窟があり、天英・天任・天柱・天心・天禽・天輔・天冲・天芮・天蓬と呼ばれる九老が修道を行った場所として知られている*1。

ただ、時代を経るに従って徐々に「峨眉山は普賢菩薩の聖地」ということが強調され、主となる施設はほぼ仏教系の寺院となってしまった。現在では峨眉山といえば、ひたすら普賢の道場であり、四大仏山の一つであるという点のみが強調される。

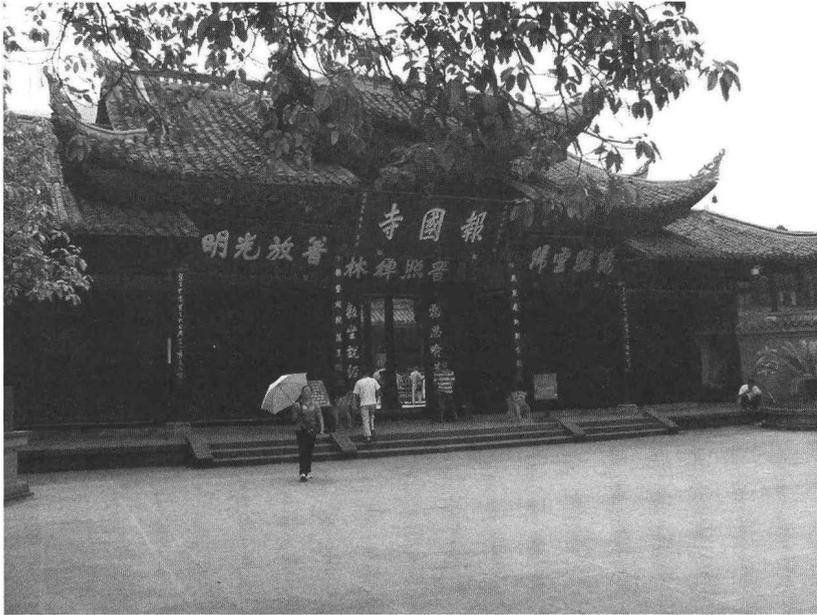
峨眉山の主要な寺院の中では、麓にある最大の寺である報国寺、その近くにある伏虎寺、山の中腹にある万年寺、さらに頂上部分である金頂と華蔵寺などの知名度が高い。ここでは筆者が訪れた幾つかの寺院を中心に、現在の状況について紹介したい。

注1…「峨眉山仏教網」
(<http://www.emsfj.com/Index.html>) また以下では適宜、許止浄『峨眉山志』(江蘇広陵古籍出版社1993年)を参照した

2. 報国寺・伏虎寺

峨眉山に入るための起点となっているのが報国寺の地区である。世界遺産に指定されてからは、一般のバスが入れないため、この付近に入山専用のバスターミナルがある。

報国寺は、明代万暦年間に建てられた寺院で、元来は「会宗堂」といった。清の康熙年間に報国寺に改められ、現在に至っている*2。



注 2…「峨眉山仏教網」
(<http://www.emsfj.com/Index.html>)「報国寺」の項目

報国寺山門

報国寺では、山門・弥勒殿・大雄宝殿・七仏殿・普賢殿と続く構造になっている。これは一般的な中国の寺院の構造とやや異なっている。第一殿の弥勒殿は一般の寺院の天王殿に相当するが、あくまで弥勒菩薩を中心にするもので、通常ので天王殿とはやや性格が違っている。第三殿の七仏殿は、毘婆尸仏・尸棄仏・毘舍浮仏・俱留孫仏・俱那含牟尼仏・迦葉仏・釈迦仏の所謂「過去七仏」を祀るものである。これも現在の中国の寺院では見ることの少ないものである。第四殿の普賢殿は、当然ながら白象に乗る普賢菩薩を祀っている。

報国寺の近くには伏虎寺がある。もとは小庵であったものが、清代になって拡張された寺院である。尼寺として有名であったようだ。こちらも弥勒殿・韋馱殿・大雄宝殿・羅漢堂という形で、一般的な寺院構造とやや異なる。もっとも、五百羅漢を祀る羅漢殿については、1995年に建てられたものである。弥勒殿の上には康熙帝が賜った「離垢園」の額が掛けられている。また、大雄宝殿の隣には明代に作られた「華嚴宝塔」が残されている。



伏虎寺弥勒殿

3. 金頂・華藏寺

報国寺のバスターミナルから、峨眉山内を周回するバスに乗る。金頂に行くにはまず接引殿まで行き、そこからロープウェイに乗る。ターミナルから金頂までは2時間程度かかった。接引殿も、本来は大きな寺院であったが、火災で焼失し、その後新しい建物が建てられたが、あまり寺院としては機能していない感じであった。



金頂華藏寺

峨眉山の頂上付近を金頂と呼ぶ。華藏寺はその金頂の海拔 3077 メートルの位置に建てられたものである。

かつて明万暦年間に銅殿が作られ、金箔で飾ったために金殿、また金頂と呼ばれるようになった。また清の光緒年間に木造の殿宇も建てられたが、何度も火災に遭い焼失した。文化大革命の時期には放送施設として使われていたようであるが、これもまた大火にあって無くなり、現在の建物は 2005 年に竣工したものである³。同時に、高さ 48 メートルの巨大な普賢菩薩像が造られた。

注 3…「峨眉山仏教網」
(<http://www.emsfj.com/Index.html>)「華藏寺」の項目



金頂の普賢菩薩像

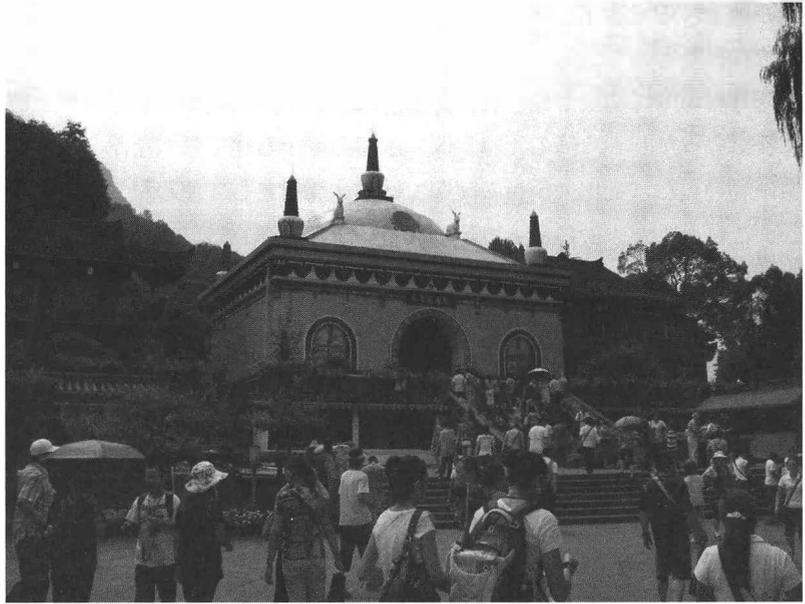
4. 万年寺

金頂からロープウェイで降って接引殿まで戻り、そこからは万年寺に向かった。万年寺は山の中腹の海拔 1020 メートル付近にある。バスターミナルからいったんロープウェイで登る必要がある。

創建は東晋の時代とされ、峨眉山の寺院の中でも古い層に属する寺院である。当初普賢寺であったものが、唐代には白水寺と改名され、さらに明代には万年寺とされた。

山門・弥勒殿・無梁磚殿・三宝楼・巍峨宝殿・大雄宝殿という構造になっている。歴史が古い寺院であるために、古い文物が豊富に残されている。

特に無梁磚殿は、普賢菩薩を祀るものであるが、明代に構築されたものとはいえ、インドの寺院を模した造りになっており、非常に特異なものである。またこの殿の中にある普賢菩薩像は、宋代のものであるとされている。



万年寺無梁磚殿

5. まとめ

今回の調査旅行では、初めて四川及び峨眉山に入ったこともあり、主要な寺院を巡るだけで終わってしまった感がある。また峨眉山は他の聖地と比しても広大な領域を持ち、一度の探索だけではその全容を知るのは不可能であろう。また次回以降も調査を重ねてみたい。

一方で、峨眉山は普陀山や九華山に比して、宗教聖地というよりも観光地を感じさせる所となっているような感覚を覚えた。例えば、普陀山の場合、本当に五体投地を行いながら石段を一段一段登っていく信者を幾人も見たが、峨眉山の場合熱心に拝む人間の割合が少なかったように思える。こういった四大仏山の中の差異についても、今後考えていきたい。